

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	クラシック音楽家に対する新たな視点での評価に向けた基盤研究 －鷺見五郎の演奏活動の実態調査を中心に－
キーワード	①鷺見五郎、②再評価、③演奏活動の実態

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	ヤマカワ チカ 山川 智馨
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	鳥取短期大学 幼児教育保育学科 助教
現在の所属先・職位等	同上
プロフィール	2015年広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了。第1回鳥取県クラシックアーティスト・オーディションピアノ部門最優秀賞。第15回さくらびあ新人コンクールさくらびあ大賞(第1位)。第34回広島市新人演奏会出演。2014年広島大学より学長表彰受賞。同年、広島市にてソロリサイタル開催。島根総合福祉専門学校児童福祉科専任教員、大阪健康福祉短期大学保育・幼児教育学科専任講師を経て、2021年4月より現職。

1. 研究の概要

本研究は、昭和期に多様な活動を展開した音楽家である鷺見五郎の再評価をとおして、「活動の多様さ」という視点でクラシック音楽家を評価することを試みるものである。その方法として、公演プログラムやレコードといった一次資料の収集および五郎が作編曲した作品の楽譜の収集を行った。また、鷺見家と親交の深い関係者から情報を提供していただき、それらの内容を精査することで、五郎の演奏の特徴について考察した。

2. 研究の動機、目的

2021年に開催された第18回ショパン国際ピアノコンクールにおいて、反田恭平氏が日本人として半世紀ぶりに2位入賞した際、その結果だけでなく、株式オーケストラの指揮者兼経営者としての顔も紹介され、大きな話題となった。このような例はクラシック音楽家としては珍しく、マルチプレイヤーの先駆者という印象を世間に強くもたらした。しかし、我が国において、音楽家としての多様なあり方が注目され、評価された例は見当たらない。そこで申請者はマルチプレイヤーの草分け的存在である鷺見五郎(1916-2000)に着目し、その功績を辿る研究を進める中で、本研究の着想に至った。

鷺見五郎は、昭和期に主に活躍した鳥取県米子市出身の演奏者・音楽教育者である。演奏者としては、国際的ヴァイオリニストの巖本真理を筆頭に、超一流演奏家の伴奏ピアニストとして10年以上活躍した実績が第一に挙げられる。また、主宰するアンサンブル団体で指揮者としての活動や、国際的ソリストを招いた演奏会を40年近く続けていた。さらに作編曲も手がけ、合唱曲集やオルガン曲集、兄の三郎と共著のヴァイオリン教則本等を刊行したりするなど、多様な活動を展開した。音楽教育者としては、1966年から白梅学園短期大学教養科(以下、白梅)の教授に就任し、独自の音楽教育を目指してピアノ教則本を複数刊行したことで、

同大学が現在まで「保育の白梅」とよばれる土台を築いた重要人物のひとりでもある。また、絵画の才能にもすぐれ、1960年代から東京で度々開催した個展では作品が完売することもあるほどだった。このように多様な活動を昭和期に展開し、それぞれにおいて功績を残した点で、五郎は日本の洋楽壇におけるマルチプレイヤーの草分け的存在といえる。しかしながら、五郎に関する資料はきわめて少ない。この要因として、マルチタスク型の人物は一点特化型の人物よりも評価されにくいのではないかと申請者は推測した。しかし、五郎の功績は現代まで残っており、いずれも見過ごすことのできないものばかりである。

そこで本研究では、演奏者と音楽教育者として分けた五郎の功績のうち、キャリアが先である前者に焦点を当て、五郎の演奏活動の実態について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の結果

(1) 演奏の特徴

今回入手できた演奏記録はレコード1点、レコードを書き込んだCD-R2点の計3点である。しかしCD-Rの1点は購入したレコードと同じ内容であったため、実質2点の入手となった。いずれもヴァイオリンの伴奏であり、聴取をとおして五郎の演奏の特徴を検討した。その結果、五郎のピアノは澄んだ透明感のある音色であると感じられた。また、録音のため伴奏の音量は多少絞られていることが予想されるものの、音量的にも表現的にも主役であるヴァイオリンのメロディーを決して邪魔することなく、流れるように進んでいく演奏であるように感じられた。



収集した演奏記録とレコードプレーヤー

(2) 楽譜テキストの特徴

五郎が教鞭をとっていた白梅学園大学・短期大学図書館にて所蔵されている楽譜5冊を閲覧し、五郎の手がけた楽譜テキストの特徴を検討した。5冊のうち、合唱曲集である『コーラスの花束』は五郎がすべて作曲した合唱曲集だと予想していたが、そうではなく、世界各国の合唱曲や、独唱曲を合唱用にアレンジしたものであった。そして、それらの収録曲は演奏会で取り上げやすく学生の音楽教育にも適していると五郎が判断したものが収められているということが分かった。このような手法による構成は、オルガンおよびピアノの教則本である『朝日ソノラマオルガン教室』や『学生のためのピアノメソッド』、そして申請者がこれまでに特徴を分析した『やさしくたのしいピアノメソッド』改訂版とも合致していた。このことから、五郎の手がけた楽譜テキストは、オリジナルの曲ばかりを収録するのではなく、国内外の作品から良いと思ったものをふんだんに取り入れ、その中に五郎自身のエッセンスを混ぜるという手法が取られていることが分かった。



白梅図書館所蔵の楽譜

(3) 画家としての姿

今回は五郎の演奏活動の実態を捉えることを目的としていたが、関係者へのヒアリングから、「五郎が米子に帰省した際に医大の屋上で絵を描き、その後銀座で売ったところ、すぐに売れた」という情報を提供していただいた。五郎の絵は個展で完売することもあったと兄の三郎の自伝でも語られていたが、五郎のマルチプレイヤーぶりを裏付けるほか、故郷の米子との結びつきがわかるエピソードである。なお、この話のほか、五郎が描いた絵画データ7点、五郎および驚見家に関する写真データ6点を提供していただいた。

4. 研究者としてのこれからの展望

五郎の演奏の特徴や楽譜テキストの特徴を捉えることができたことや、思いがけず五郎の画家としての姿について情報提供していただいたことが、本研究の成果として挙げられる。しかし、五郎の多様な功績を辿るうえでは、まだ一部分であるのが現状である。五郎の活動の幅広さに加え、今回は演奏記録の主要な入手先であるオークションサイトで2月まで出品が途絶えてしまったことや、申請者の新型コロナウイルス感染により研究スケジュールが遅れ、研究計画を一部縮小したことも一因である。今後も引き続き演奏記録の収集やフィールドワーク等をとおして、五郎の人物像にさらに近づきたい。そして、今回およびこれまでの研究結果をふまえ、顕彰事業を企画し、五郎が実際に演奏したプログラムの再現コンサートを試みることで、五郎の再評価を目指したい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は若手研究者奨励金に採択していただき、心より御礼申し上げます。本奨励金により出張旅費がいただけたことや、高額の研究備品を購入できたことで、これまで机上で細々としかできなかった研究を前進させることができました。また、競争的資金を初めていただけたこと自体も研究者として大きな励みになりました。今後さらに研究を続け、地元である鳥取県の音楽振興、そしてクラシック音楽界の新たな価値観の創出を目指していく所存です。